

# 釣れ釣れなるままに

2013年思い出の釣行記 PART. 10

## 鹿島釣狂

### 東歌別のドン

平成25年度第3回大会が6月23日（日）に笛舞港～東洋港で開催された。今回はお客様として吉田潤一氏お迎えし、総勢15名の参加者を乗せて一路エリモへ向けて出発した。当日は、朝方霧がかかったが、快晴で波も1m前後で風もなく暖かい絶好の釣り日和になった。また、その日は1年のうちで月が地球に一番近くなる日で、釣り場に着いたときから満月がデカデカと私たちを見守ってくれていた。

早々に着替えを済ませて11時半には、それぞれの釣り場にルンルン気分で下りていったが、私達より早く着いた他の釣り会で各舟揚場は満杯の状況だった。当日は潮が大変良いということで日程を決めたのだが、他の会も同じように考えたらしい。また、胴長を自家用車に忘れてしまった会員のために、途中、静内の釣具店に立ち寄ってスパイクブーツを買い求めたことがタッチの差で遅れた要因となってしまったのか。潮が引き始めた頃は、海鱗会、和光会、快釣会、釣和会、釣りクラブ、優釣会、フィッシングクラブと競合しながらの先陣争いとなった。

私は、西東洋エンドモ岬にするか、東歌別にするか最後まで悩んでいたが、結局通いなれた東歌別に下りた。会員では私一人だった。いつもの溝で竿を出したその1投目に40cm弱のアカハラがゴロに食いついてきた。この時期、アブラコは間違いのないところだが、嫁に心配があるのでホッとす。本日の大会でも大アブラコを4本揃えたが、嫁がなくて涙を飲んだ会員が何人もいたのだ。続けてアカハラばかりが来る。いつもはこの溝にアカハラなどいないのだが……。更に35cm程のカジカもやってきた。近投はほぼ探り終えたので3本の竿を全て遠投に切り替えてアブラコを狙った。しかし、アタリは出ない。

付近の舟揚場に入った釣り人の様子を伺いに回る。右隣の舟揚場では2人でカジカ5本にタカノハ1枚、左隣の舟揚場でも2人が竿を出していたので声を掛けると、その一人は医釣会会長の中江政美氏だった。昨年この東歌別大平盤の隣同士でご一緒したが、見事なアブラコを揃えた中江氏に比べて、私は小物ばかりだった。中江氏はまだハゴトコばかりで芳しくないようだ。更に奥のほうの舟揚場にも進んでみたがあまりよい情報は得られなかった。

自陣に戻って遠投を繰り返すが、豆カジカにハゴトコばかりで大きなアタリは出ない。竿先がウグググッと引き込まれ、そして竿の胴までグウイン、グウインと曲がり、最後は竿尻が跳ね上がるという感じのアタリが出ないのだ。今年は全くの不調で、今まで竿

尻を持ち上げるような大物にめぐり会えなかった。最近では道北の砂浜で、乗るか乗らないかの真ガレイの微妙なアタリに、竿先をフラットにして道糸を送り込んで次の引き込みを待つような釣りばかりしてきたのだ。

ようやくその竿尻を持ち上げる大きなアタリが出た。ホンダワラをブチッ、ブチッと切りながら上がってきたのは45cm程のアブラコだった。久しぶりに味わう感触で、妙に懐かしく感じた。これだからエリモ方面の釣りはやめられない。

余裕が出てきてもう一度中江氏の様子を伺いに行く。ハゴトコしか釣れなかったが今クロガシラがあがったとバツカンを開いてくれた。海水を入れたバツカンには50cmに届こうかという身の厚いクロガシラが鱗を打っていた。こんなところにクロガシラがいるとは思わなかった。



大物クロガシラを仕留めた中江氏

## 鎌はない？

6時、流れ昆布拾いの漁師と共に潮が引いてきた十八番の岩に乗ることにする。まだ完全に潮が引ききっていないので、その最後の渡りに難儀していると、磯舟に乗った昆布拾いの漁師が、一旦リュックを置いたその岩からまっすぐ進めと声を掛けてくださる。それは分かっているのだが海底を探る為にストックを突いても最後の足がかりとなる岩がなか

なか見つからなかったのだ。その岩を足がかりにしないと背中リュックが海水に浸かってしまうのだ。一瞬なのだがその1歩が踏み出せない。東歌別の大平盤は深い溝がなく簡単に乗れるのだが、ここだけは、幅2mほどの深い溝がある。一番潮が引いたときでもこの溝には海水が残っているのだ。

右往左往しながらも、まずは竿袋だけを担いでようやく先端の岩に乗ることが出来た。竿を三脚に設置して、後は仕掛けをつけて打ち込むだけにしてから、重いリュックを取りに戻った。この私が十八番とする岩は1箇所の遠投にばかりアブラコが出るところだ。密集したホンダワラの林が消えるところが深くなっているらしく、今まではその穴のようなところに2本バリ仕掛けを入れて大アブラコを手にしていた。しかし、2本バリでは届かなかったさらに奥のほうにある同じような穴も魅力的に見えて、今回は1本バリ仕掛けで更に遠投をかけた。思ったとおりで、すぐに竿を大きく引き込むアタリが出た。竿を煽るとホンダワラの密林に潜り込み、なかなか抜けてこなかったが、竿を強く引っ張りながら持っている、グリッ、グリッと本日の頭となった50cmほどのアブラコが抜けてきた。



身長優勝を獲得したアブラコ

しかし、まもなく昆布取りの磯舟が目の前に集結してきて竿を出すこともままならなくなってきた。しまいには、ほんのチョイ投げしたところにまでやってきては、鉤爪のついた棒を操って昆布を拾っている。いや、そうではなさそうだ。よくよく見ると、流れ昆布

を拾う木製の鉤のついた棒ではなく、その棒の先には草刈鎌が括り付けられていた。どうもホンダワラを刈っている様だ。本格的な昆布漁が始まる前に邪魔になるホンダワラを刈り取っているのだ。しばらくは打つのを我慢しなければならなかった。漁師は大丈夫だというのだが、道糸が触れるところに鎌を入れているのだ。昆布取りの時期ならもちろん怒鳴られるところだが、作業ものんびりとしたものである。漁師は何度も「構わないからやっていいぞ」という。構わないと言われても妖しく光る鎌を手にはしているのだ。「構わない」ではなく「鎌はある」のだ。

## カジカに変身

地元の漁師がタコ捕りにやってきた。鉤爪のついた長い棒を横穴に差し込み棒を微妙に操っていると、何か手ごたえがあったのか、ゆっくりと間合いをおいた。「タコいたんですか」と声を掛けると、「この穴の先がトンネル状になっていて無理をするとタコを向こう側の出口に追い出してしまうことになるので慎重にしている」と話してくれた。そして引きずり出したタコは漁師にとっては小さいものだった。タコの頭をひっくり返してから、そのまま海草の上に放置した。するとホンダワラ刈りをしていた磯舟が近づいてきてそのタコ漁師を乗せて、深めのところにある横穴を紹介したようだ。昨日、その穴で大ダコをとったということで、鉤棒を操ってすぐにその穴から大ダコを引っ張り出した。先客が居た穴に新しく住み着こうとした大ダコがまんまと落とし穴にはまったのだ。

そのタコ漁師が、今度は私に「タカノハは釣れたか」と話しかけてきた。何でも、昨日の漁のときに昆布の下に大きなタカノハがいたというのだ。「ほらそこだ」と磯舟のいないところを指差すが、果たして昨日見たタカノハがまだそこにいるものだろうか。確かに、タカノハ場というものは存在し、例年のようにタカノハが上がるのはほぼ決まった場所だ。タコのように同じ場所に住み着いていてくれればよいがと指し示されたところに、仕掛けを振り込んでみた。

しばらくすると大きなアタリが出た。やっぱり漁師の言ったことを信用したのがよかったと期待しながら竿を煽ると、浅海からゴボッと出てきたのは大口を開けた40cm強のカジカだった。嫁として長さに優れる38cmのアカハラか、重さに優れる35cmのカジカかを悩む必要はなく、嫁はアカハラを上回るこのカジカに決まった。





本日の私の釣果

### 審査結果

優勝	嵐 光博	1 5 8 9 点	(アブラコ465mm+カジカ 460mm+6640g)	菊 水
準優勝	堀内正博	1 5 7 4 点	(アブラコ473mm+カジカ 440mm+6610g)	日勝大和
3 位	佐々木 清	1 5 6 8 点	(アブラコ440mm+カジカ 440mm+6880g)	夕日ヶ丘
4 位	岡 英成	1 4 8 4 点	(アブラコ440mm+カジカ 420mm+6240g)	坂 岸
5 位	吉井 博	1 4 5 3 点	(アブラコ446mm+カジカ 400mm+6070g)	西 東 洋
身長優勝	鹿島釣狂	1 5 6 8 点	(アブラコ486mm+カジカ 394mm+6880g)	東 歌 別

今回の大会は、普段の大会なら優勝を狙える1400点以上を出した会員が6名も出た。その誰もが、釣り場では自分が優勝をと確信していたのではないだろうか。私も例外ではなく、身長賞をとったアブラコが来た時点で「これはひょっとすると、しかし、私が釣れているのだから他の人はもっと・・・」と思いながらも気を抜かないで最後まで頑張ったが、やはり上には上がいた。

優勝者は、得意とする菊水に入った嵐氏であった。200名以上の参加者が集った道釣連60周年記念大会で優勝者が入釣した場所もこの辺りで、全道の強者がこの方面に集結し魚が釣り上げられてしまったのではないかと思われたが、さすがに嵐氏である。付近の釣り場では誰もが狙う岩に、意を決して先陣を切り、そこからアブラコやカジカの大物を引き抜いたのだ。前日まで腰を痛めて治療院に通ったといっていたはずだが、釣り場に立

つと痛いところは吹っ飛んでしまったようだ。これで今年は3連覇である。富士山の世界遺産が登録されたが、美保の松原と共に嵐氏も登録して頂きたいぐらいである。

来月は、釣遊会創立50周年を記念する大会である。温泉入浴で体を癒し、50年の歴史と伝統を振り返りながら会の絆を更に深めていきたいと考えている。



左から準優勝：堀内氏、優勝：嵐氏、3位：佐々木氏

## 熱中症もどき

職場に携帯が鳴った。岩見沢市役所に勤めるY氏からで、「役所に札幌の釣り人から電話が入った。何でも釣りの最中に具合が悪くなった釣友を助けて頂いた岩見沢の人にお礼が言いたいという内容だった。それで俺のところに電話が回ってきた。あんたの携帯電話の番号を教えていいか」というものだ。

また携帯が鳴った。海鱗会の渡辺 豊と名乗る御仁からだった。「その節はありがとうございました。仲間が急に具合が悪くなり、熱中症と思われる症状だったので心配だった。冷たい飲み物もなく途方に暮れているところに岩見沢釣遊会のバスが停まったので、訳を話したところ快くクーラーボックスの中から氷の入ったペットボトルを差し出してくれた。すぐに仲間に冷たい水を飲まして氷で体を冷やすと随分と良くなった。バスが去ってしまっていたので十分なお礼を申し上げることが出来なかった。本当にありがとうございました。」

またまた、携帯が鳴った。今度は海鱗会のK氏からだった。「先日は、本当に危ないところを助けて頂いてありがとうございました。何としてもお礼を言いたくて仲間に相談したところ貴方のことを探し出してくれました。目黒漁港からオンコの沢に向かい、何とか4

7. 8cmのアブラコを仕留めたまでは良かったのですが、8時に片付けて帰りの道中、強い日差しで、頭がクラクラしてきたと思ったら足までガクガクしてきて、ようやくの思いで目黒に辿り着きました。飲み物も飲んでしまってへたり込んで倒れていたところを仲間が氷の入った冷たい水を持って駆けつけてくれました。それは貴方が差し出してくれた命の水だったのです。その水で生き返りました。本当にありがとうございました」

なんだか凄い話になってきた。目黒漁港で最後の仲間を乗せているところで、渡辺氏が助けを求めてきたのだ。こちらはタカノハの刺身を当てにして、クーラーボックスに1.5ℓ入りのペットボトルを氷にして持ってきていた。もちろんそれで冷やしていた缶ビールをグビッと飲み終えたところだったのだ。タカノハが釣れなくては無用のものだ。それをたまたま差し出しただけなのだ。

それよりも岩見沢市役所まで電話してきて私を突き止めたことが凄い。こちらが恐縮してしまう。人と人の繋がりには不思議なものだ。今度また何かの縁があり釣り場でお会いする事が出来たら、釣りの四方山話でも交わしたいものだと願っている。

## 岩見沢釣遊会創立50周年記念大会

7月21日(日)、平成25年度第4回大会に併せて岩見沢釣遊会創立50周年記念大会が目黒港～十勝港で開催された。当日はうねりを伴っていたが波も1m前後で風もなく、朝方は熱い真夏の陽射しで着込んでいたものを脱ぎ捨てての釣りとなった。

私は、吉田潤一氏と共にオニトップで下りた。吉田氏の相棒である島氏が港に入るとい、港では面白くない吉田氏が一緒に連れてってくれというので案内したのだ。着いたときは満潮時間帯で覆道脇に付いた階段の上から溝を狙って釣りをしたのだが、根掛かりばかりを繰り返した。更に悪いことに、後から右に入った御仁が、私が投げている狭い溝に被せるように打ってきて、何度もオマツリしてしまった。その御仁より更に右の溝を狙っていた吉田氏も何も来ないということで、二人してオニトップ川河口に移動することになった。

オニトップ川河口付近には、矢根氏がいた。彼は、まずは嫁のアカハラを取り、あわよくばとタカノハを狙っていたのだが、アカハラしか来ないと荒磯の方に移動していった。

本日最初の訪問者はアカハラで、その後ハゴトコも4匹来て何とか規定の魚はそろったがどうも寸足らず気分がよくない。突如としてやってくるはずのタカノハの気配も感じない。矢根氏が向かった荒磯の方に足を伸ばしてみた。矢根氏は40cm程のアブラコを仕留めたのだが狙いのタカノハはまだのようであった。すっかり明るくなった頃、吉田氏が40cm強のタカノハをあげた。私が一緒に誘った手前、ホッと胸を撫で下ろした。





最後に渡った岩でカジカが出る



本日の釣果と思ってシャッターを押したが、この後カジカをもう1匹釣り上げて引き上げた。



右方向によい昆布根が見えたのでそこに移動して打ち込むとようやく40cm程のアブラコが釣れた。これからだと思っているところで5:00のサイレンが鳴り、昆布取りの磯舟が猛スピードで舳先をあげてやって来て、私が打っている所で昆布取りを始めた。丁度、潮も引いてきていたところだったので、その昆布根は諦めて、沖の方に点々と連なった岩盤の先に出て打つことにした。

そこで40cm程のカジカが来た。更に続けて大きなアタリが出た。手前の岩を避けて、引きずり出したカジカは45cmほどのものだった。更にカジカを追加したところで9:00の締め切り時間を迎えてしまった。

### 審査結果

#### 審査結果

優勝	岡 英成	1476点 (カジカ 436mm+アブラコ428mm+6120g)	ルベシベツ
準優勝	鹿島釣狂	1298点 (カジカ 455mm+アブラコ379mm+4640g)	オニトップ
3位	矢根政仁	1208点 (タコノハ427mm+アブラコ391mm+3900g)	荒 磯
4位	西川紘一	1138点 (アブラコ435mm+アカハラ347mm+3560g)	モイケシ
5位	谷口良幸	1136点 (アブラコ399mm+カジカ 386mm+3510g)	目 黒
身長優勝	佐々木 清	1190点 (カジカ 470mm+アカハラ378mm+3420g)	音調津



入賞者の顔ぶれ

総合優勝者は、ルベシベツに入った岡氏であった。「つりしん」の大会情報で好釣を伝えられていたが、その上をいく釣果だった。入釣時はアカハラ狙いの竿に大物のカジカが竿を揺らし、明けてから岩場に移って全て250mを超す（本人曰く）大遠投で大アブラコや大カジカを射止めたのだ。同じくルベシベツからモイケシ方面に歩いた西川氏は、自分が打っているところが「浅いから釣れないぞ。あっちへ行け」と昆布漁師に言われて移動したところで大アブラコを抜いてきた。嫁がアカハラで後れを取ったが総合4位の成績だった。

準優勝は図らずも私だった。最後に乗った岩でカジカを引き抜いたことが幸いした。矢根氏は最後の最後にアブラコもそして見事なタカノハをもゲットして堂々の3位に入賞した。第5位の谷口氏は前野氏、嵐氏と共に目黒港で下り、暗い内にアカハラを取った。そして、明けてからサルル方面に移動し、大口を開けたカジカをものにするるとともにグットサイズのアブラコをも引き抜いた。我が会の両雄を従えての堂々たる成績だった。両氏とも「庇を貸して母屋を乗っ取られる」心境か。

身長賞を取った佐々木氏は、タカノハ狙いで栄浜を予定していたが岬トンネルを見逃してしまい、音調津の磯に荻野氏と共に入った。アカハラは順調に来ていたが、狙いとしていたタカノハは出ない。しかし、オリコマナイ方向に移動した先で身長賞を取った47cmのカジカをものにしたのだ。荻野氏もしっかりとタカノハをゲットしてきた。

大会後は岩見沢釣遊会創立50周年を祝い、アポイ山荘で温泉に浸かって疲れを癒し、会長の乾杯の音頭で喉を潤した。



風呂上がりのビールが美味しい。